

- Bremen. Abh. naturw. Ver. Bremen 34: 181-440.
- HUSTEDT, F. 1962. Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meersgebiete. In Rabenhorsts, L. (ed.) Kryptogamen-Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz 7: 433-576.
- 岩城住江 1956. 豊平川の珪藻. 藤女子短大紀要 1956: 51-107.
- 岩城住江 1968. 五十鈴川の珪藻. 藻類 16: 21-51.
- LUND, J. W. G. 1946. Observations on soil algae 1. The ecology, size and taxonomy of British soil diatoms. 2. New Phytol. 45: 56-110.
- 奥野春雄・黒沢喜一郎 1959. 三段峡 および 八幡高原の珪藻. 三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告 265-275. pl. 1-4.
- PATRICK, R. and REIMER, C. W. 1966. The diatoms of the United States 1. Philadelphia.
- PETERSEN, J. B. 1935. Studies on the Biology and Taxonomy of Soil Algae. Dansk Bot. Arkiv 8: 1-183.
- SKVORTZOW, B. V. 1930. Notes on Ceylon Diatoms 1. Ann. Roy. Bot. Gard. Per. 2: 251-260.
- VANLANDINGHAM, S. L. 1975, 1978. Catalogue of the fossil and recent genera and species of diatoms and their synonyms 5, 7. J. Cramer, Lehre.

千原光雄：中国における藻類研究の現状 (1) Mitsuo CHIHARA: Phycological research activities in China (1)

昭和56年1月半ばから2月初めにかけて、日本学術振興会の御好意と中国科学院 (Academia Sinica) の招きで中国に滞在し、幾つかの研究機関を訪れ、専門を同じくする人達と交流を深める機会を持つことができた。日中両国の国交が昭和47年9月に正常化されて以来、日本からの訪中者、中国からの来訪者あるいは留学生は年々増加の一途を辿っているが、日中間の共同研究のための人物交流は必ずしも盛んとは言いがたい。私達は、かつて多くを学んだ中国について余りにも知らないことが多いといえる。日本学術振興会においては、日中の共同研究について深い関心を持たれ、昭和54年より、中国科学院との間に日中共同研究のための研究者交換制度を発足させ、日本からの研究者の派遣と中国からの訪問者の受入れに努力されている。今回の私の訪中の課題は、中国の藻類研究の現状を視察し、将来の日中間の共同研究のための資を得ることであった。滞在期間が3週間の予定であったので、私は訪問する主な研究機関として次の4つを選んだ。すなわち (1) 国立植物研究所 (北京), (2) 国立海洋研究所 (青島), (3) 国立水生生物研究所 (武漢), (4) 国立華南植物研究所 (広州) である。これらの機関はいずれも中国科学院に所属する。

以下、藻類に関することを中心に、中国における研究活動の現状の一端を報告したい。この小文が日中間の今後の藻学研究に役立てば幸いである。なお、掲載誌の都合上、この小文を幾つかに分割することをお許しを願いたい。

稿を進めるに当たり、訪中の機会を与えて下さった日本学術振興会と中国科学院に厚くお礼を申し上げる。

1. 中国科学院植物研究所 (北京) Institute of Botany, Academia Sinica (Peking) 北京西直門外大街 141 号

この研究所は当初は植物分類研究所として発足したが、その後機構が変り、現在は10研究室、職員数約400名をもつ植物学の総合研究所となっている。それぞれの研究室名と研究者等の数を記すと次のようである。

- 1) 植物分類研究室, 総職員数69名 (内 研究者及び技術者の数60名),
- 2) 古植物研究室, 29名 (23名),
- 3) 植物生態研究室, 45名 (39名),
- 4) 植物化学研究室 40名 (35名),
- 5) 植物形態研究室 21名 (14名),
- 6) 植物細胞研究室 24名 (20名),
- 7) 生物固気研究室 (窒素固定研究室) 25名 (20名),
- 8) 光合成研究室 36名 (25名),
- 9) 植物生理研究室 50名 (45名),
- 10) 植物誌編纂室 7名。

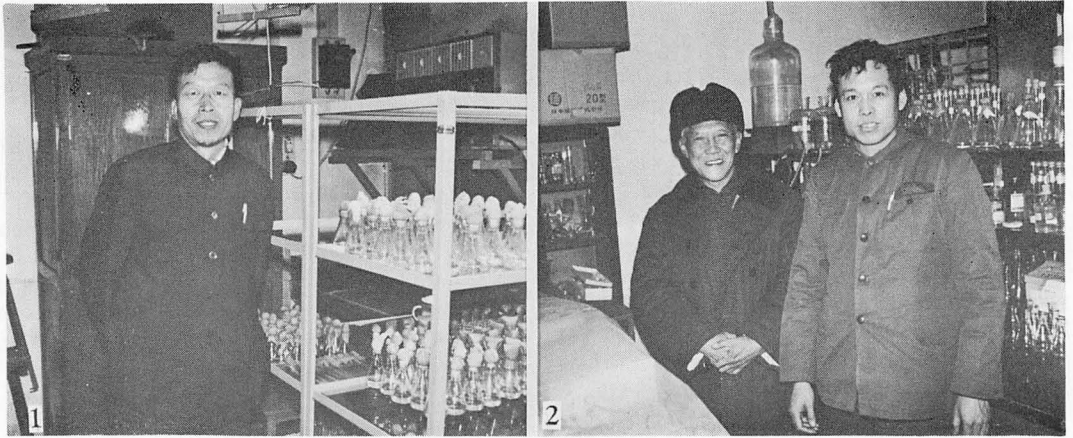


図 1. 白克智氏とアカウキクサより分離した藍藻アナベナの培養。図 2. 藍藻ネンジュモ類の窒素固定の研究に従事する王友珠氏（左）と共同研究者。中国科学院植物研究所にて。

この研究所が植物分類研究所として出発したこと及び現在中国は中国全土の植物誌の完成を目指していることなどのゆえか、上記の研究室中最大のものは植物分類部門である。この研究室はさき出版された中国高等植物図鑑（5巻、1972-1976、各巻1000頁余）の作成の中心的役割を果たしたが、さらに中国産維管束植物のすべてを含む中国植物誌の完成を目指し、他の国立植物研究所、省立研究所及び大学の関係研究者達と共同して研究を進めている。標本資料室は充実し、管理も行き届いている。所蔵標本数は以下のようなものである。標本総数約120万点、標本の種類の内訳（被子植物25,000種、裸子植物700種、シダ植物2,600種、コケ植物2100種）。なお、藻類と菌類の標本はここにはなく、藻類のうち、海藻は国立海洋研究所（青島）、淡水藻は国立水生生物研究所（武漢）、そして菌類は主に国立微生物研究所（北京）にそれぞれ保管される。従って分類を専門とする藻類研究者はここにはいない由である。しかし、藻類を使って光合成や窒素固定の研究を進める二つのグループがいる。一つは水生のシダ植物アカウキクサ（*Azolla*）の葉に内生する藍藻アナベナ（*Anabaena*）の光合成や窒素固定の研究に携わる白克智（K.-Z. Bai）氏と共同研究者のグループ、他の一

つは食用としてよく知られる髮菜（ファツサイ）を含めて、ネンジュモ（*Nostoc*）などの仲間の窒素固定の研究を進める王友珠（F. C. Wang）氏と共同研究者のグループである。白氏はアナベナの分離と培養に成功し、生理学的な面の成果がかなり出始めてきたとのことであり、王氏のグループは蒙古方面から多量に採集してきたファツサイの培養に努力中とのことであった。両氏共に日本の藻学者や植物生理学者との論文別刷の交換を熱心に希望していた。

既によく知られるように、中国は1978年（昭和54年）以降は海外との交流を積極的に進め、研究分野における海外の文献蒐集にも努力を示している。しかし、長期に及んだ戦禍や文革の影響は大きく、必要図書は必ずしも充分ではないとのことである。実際に幾つかの研究所の図書室を見た印象もその通りであった。研究者達の話では、個人の外国の学会への入会や海外からの図書や雑誌の購入は財政的な関係から一般には困難であるという。本会会員の諸氏からの中国研究者への別刷の送付をお願いしたいと思う。

北京では中国科学院植物研究所の匡副所長をはじめ所員の方達に高配をいただいた。お礼申し上げます。

（筑波大学 生物科学系）